



わら 咲う霊園

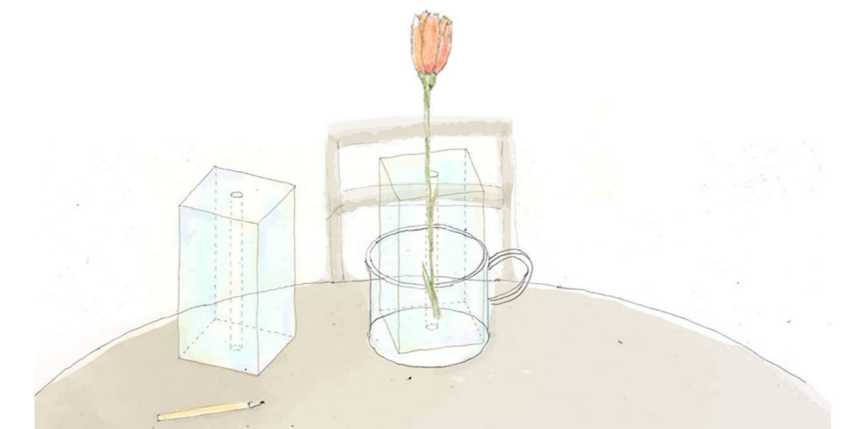
都市の郊外に佇む霊園。そこは、故人と家族にとって尊い時間を過ごす場である一帯で、広大な墓石群による風景には、日常を遠ざける絶対的な距離感を感じる。

そんな風景を少し愛らしく身近な存在へと変える、ガラスブロックの霊園を提案する。

散骨される原っぱの中に、水たまりのように浮かぶガラスブロックの献花台をひろげる。来園者が訪れる度、無機質なガラスブロックの水たまりには草花が咲い、故人を偲ぶ生者達の想いが、霊園の風景として広がっていく。

それは神聖でありながらもどこか愛らしい光景であり、形なく移ろっていく。

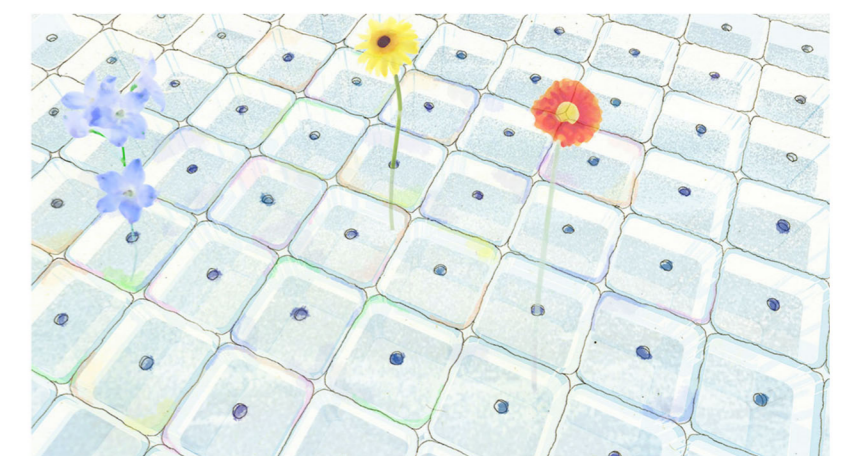
故人と生者の気配によって、現れる霊園。



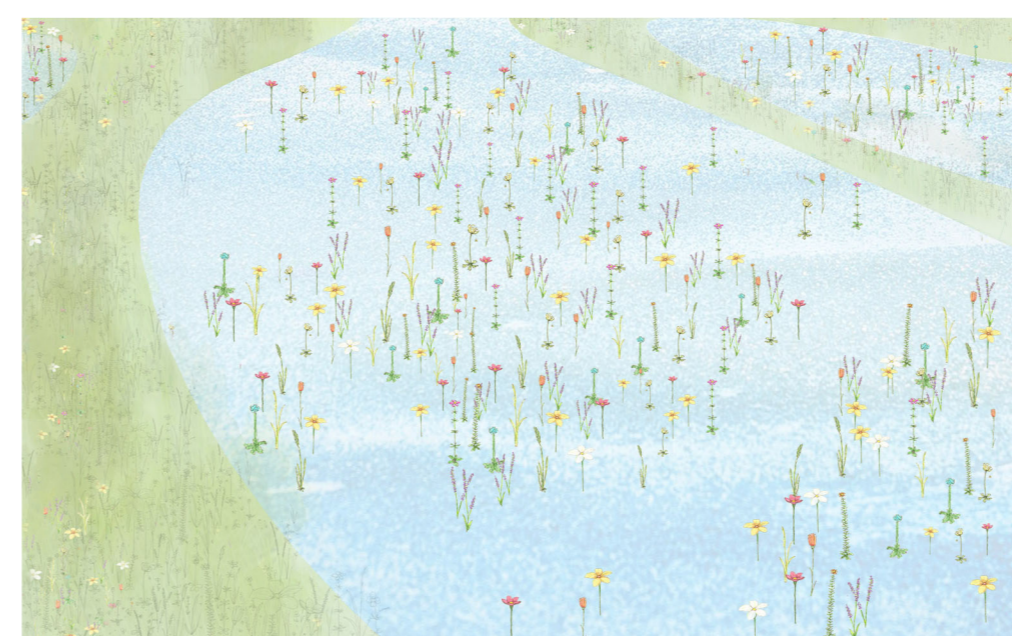
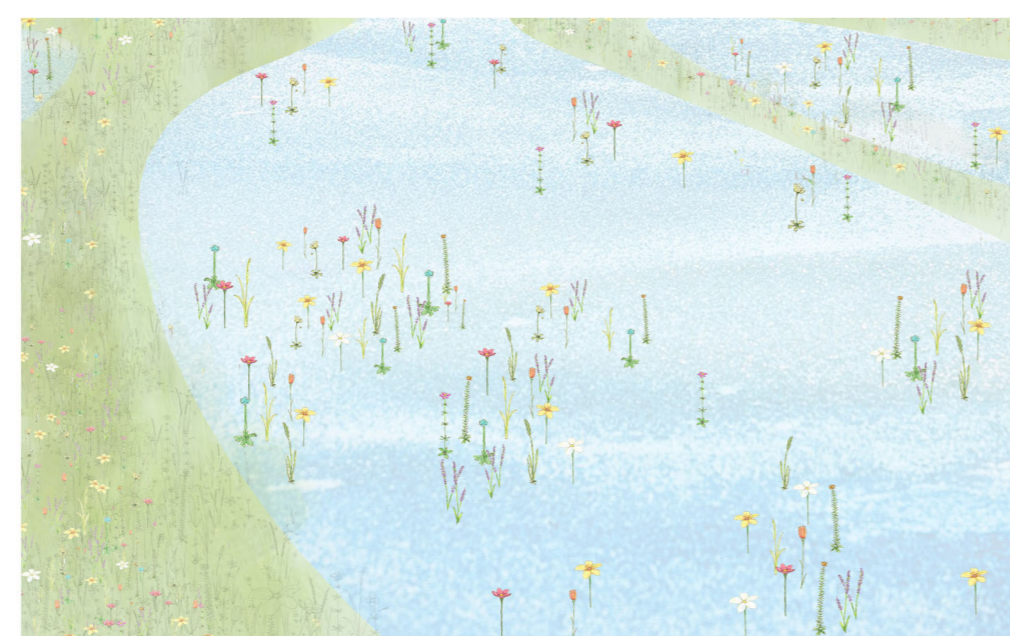
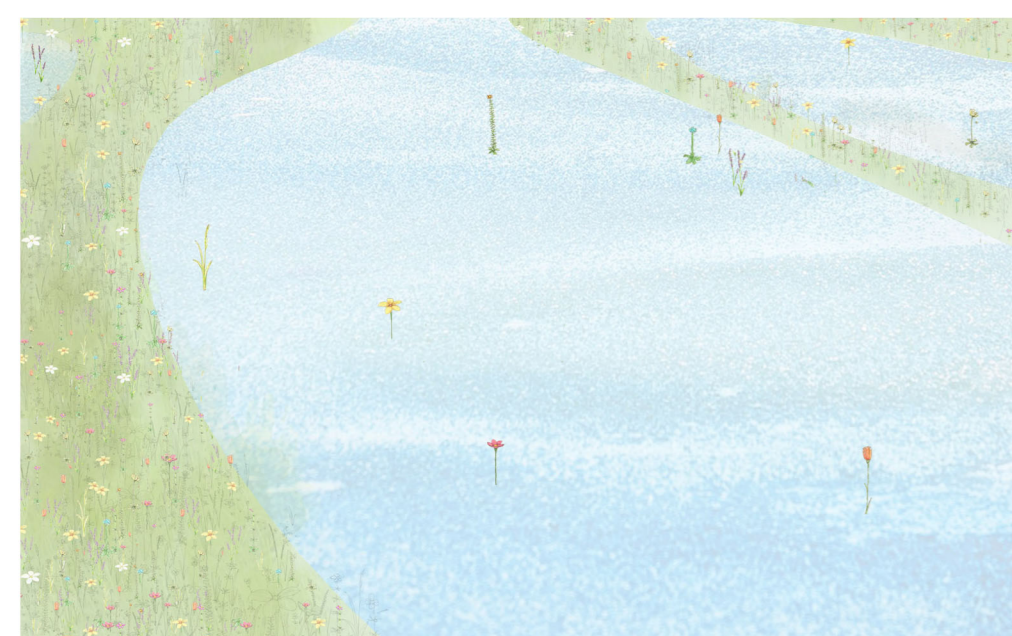
用いるガラスブロックは50×50×100mmの小さな矩形に孔が貫通した、一輪挿しになっている。花瓶のようなごく身近にあるスケールがどこまでも広がる風景をつくる。



花を生ける風習は、墓地の周囲で季節毎に咲く草花を摘んで生けることが、元来の様式であった。この霊園では、散骨した原っぱに芽吹く草花を摘んで、ガラスブロック献花台に自由に生けていく。



形成された窪みに水を張り、ガラスブロックを置いていく。生けられた花がブロックに写り込むことで、水面がほのかに色づく。



初めは、原っぱ中にガラスブロックの水たまりが空を映す静寂な風景である。

誰かの命日だろうか、故人に宛てた一輪の花が静寂な風景に波紋を広げる。

次第にポツポツと適度な間を取りながら花が生けられていく。

現れては消える献花台に咲く花は、日常の風景となる。

やがて来るお彼岸、お盆には献花台一面に草花が生けられ、盛大に故人を迎え入れる。

故人と生者の気配によって、霊園は形ない風景として移ろう。

小さなガラスブロックたちは、誰かに択んでもらうことを楽しみに待っている。